

# 議会



西脇市議会議長  
林 晴信

るが、それは議員がそのような活動に終始しているからではないだろうか。「行政とのパイプ役」を自任し、住民要望を担当課に伝えて回答をもらい、その回答を住民に伝えるだけ……これでは出先機関に見られて当然のことである。もちろん議員が住民要望を受けるのは自然なことだと思う。しかし、要望から課題を抽出して議会（委員会）での討議や意思決定が無ければ、議会の自殺行為ともいえ議会不要論に繋がってしまうと考えている。

また出先機関的活動ばかりしていくと、住民から行政に対する批判をまどもに受けてしまうことになり、「そう言わても市の対応はこうなっているので」のようない行政の言葉を使ってタジタジになつて弁明することになってしまう。これで

「住民の意見を聞いていくのはわかるのですが、大きな声に左右されてしまう危険性があると思うのですが」という質問を観察や研修でいたたこことがある。その場合の私の回答は決まっていて、「大きな声が多数の声か判断するためにも、さらに多くの住民の意見を聞く必要があるのです」と答えている。また「議会報告会を開催しても、参加者からは要望やクレームばかりなので、いつの間にか行わなくなりました」との話を聞くこともあります、その場合は「住民が要望やクレームを言うのは当たり前です。要望やクレームを言うのは当たり前です。要望やクレーム、さらには雑談の中からでも課題を見つけ出して、政策に結びつけるのが議会の役目ではないのですか」と回答している。

観察や研修等を通じて感じるのは、意外と議員は住民との対話が苦手で、支那人との話をすることはあっても、それ以外の住民との対話はあまりしないという場合が多い。それではなかなか住民から信頼される議会とはならないだろう。議会は役所の出先機関ではない。時折、そのように勘違いしている住人もいる

は、いったい議会はどこにあるのかといふ話になってしまいかねない。

西脇市議会でも議会報告会や住民との意見交換会では、参加者から色んな意見が出る。それから要望という形であったり、時には批判の声であつたりもする。そのような声を全て「政策のタネ」と認識し、その中にある課題を抽出し、全体最適化させ、政策としていくことで、初めて議会の存在意義があると考えている。だから議会報告会の開催当日よりも、むしろその後が本番になる。会場担当班等段階ごとの討議と精査を経て、常任委員会で所管事務化して課題解決に向かうスキームとなっている。

恐らく今でも議会報告会等を開催しているような議会では似たようなシステムにはなっていないことだと思う。システム

は眞似れば誰でもできる。肝心なのほどもできることを誰でもできないくらい徹底して行わないと信頼や評価というものは得られないと感じている。

私はよく「議会」いうのは住民自治ツール、道具なんです」と住民に話すことがある。続けて「だから使わないと銷びるばかりです。使い勝手がいいようにするのが議会改革。なので使ってください」と結んでいる。使えば愛着もわくし、信頼も生まれる。住民と乖離して議会は存在し得ない。常に意識すべきは「議会は住民の中にある」ということですあり、住民福祉の増進のためにどう住民の声を反映した政策を作るか、その政策を作るためにはどういう制度が必要かを考え行動していけば、議会改革なんて勝手に進んでいくことだらう。